令和　7年 2月 16日開催

2月のはりま読書の会で紹介された本

書名	著者	請求記号（所蔵あり）
生きるための読書	津野　海太郎／著	019　ツ
めざせ！給食甲子園	こうやま　のりお／著	37　コウ
エーミールと探偵たち	ケストナー／作	94　ケス
物理学者のすごい思考法	橋本　幸士／著	420　ハ
物理学者のすごい日常	橋本　幸士／著	420　ハ
対岸の彼女	角田　光代／著	F　カ
空中庭園	角田　光代／著	
烏に単は似合わない（八咫烏シリーズ）	阿部　智里／著	F　アヘ
週末フィンランド	岩田　リョウコ／著	293　イ
ひとり旅日和(1～6)	秋川　滝美／著	F　アキ

～ 読書会 memo ～

まだまだ気温が低く寒い中、5人の方にご参加いただきました。
なぜ、自分は本を読むようになったのか。その原点ともいえる著者の作品『生きるための読書』。最初は文学とは何だろう？という疑問から始まり、次第に本を通して想像することの大切さに出会ったのだそうです。『めざせ！給食甲子園』の紹介では、1時間という限られた時間で準備から片付けまで、そして一食にかけられる予算がたったの250円という条件の中で競う事の難しさをとても丁寧に教えて頂きました。給食の残り（残菜率）がいかに少なく、かつ子どもたちの心をつかむかが決め手なのだそう。
参加者の方の中で「私が幼少期から現在までに読破した全ての本を思い出した中で、最も印象に残った面白い本だった」という『エーミールと探偵たち』。戦時中の貧しいドイツの国で、強く生き抜く小さな子どもの物語。しかし、子どもらしい発想が大人の自分でもすごく面白くて、気が付いたら最後まで読んでしまう程だそうです。
見た目は仲の良い家族に見えるけれど、1人ひとり心の中は決してそうではないという事が赤裸々に表現されている『空中庭園』。作品自体は20年ほど前のものですが、スマホが主流となり、家族の団らんが減りつつある現代でも課題となることではないでしょうか。

次回は 3月16日(日)午前11時からの予定です。
※変更となる場合があります。HP等をご確認ください。